

# 芸術・文化賞 ピチェ・クランチェン

## 【贈賞理由】

ピチェ・クランチェン氏は、タイの古典仮面舞踊劇コーンを深く継承しながら、現代的視点によって再構築し、アジアの身体表現を国際的な舞台へと発信してきた舞踊家・振付家である。厳格な伝統を基盤とした氏の創作と活動は、文化の継承と革新を両立させるとともに、異なる文化や価値観の相互理解を促す芸術的実践として高く評価されている。その成果は専門家の領域にとどまらず、市民にとっても身近な舞踊文化の広がりを生み出し、芸術が社会とどのように関わり得るかを示してきた点においても意義深い。

1971年タイ生まれのクランチェン氏は、16歳より名匠チャイヨット・クンマニーのもとでコーンの厳格な修行を積み、チュラロンコン大学で応用芸術学を学んだ。2001年にはアジア・カルチュラル・カウンシルの助成を受けて米国で研鑽を積み、カリフォルニア大学ロサンゼルス校でタイ舞踊を教えるなど、早くから国際的な活動を展開した。氏はこうした経験を通じ、伝統を過去の遺産として保存するのではなく、現代社会の文脈の中で生きた表現として更新していく独自の創作姿勢を確立してきた。

2004年の舞台作品『ピチェ・クランチェンと私』では、フランスの舞踊家・振付家ジェローム・ベルとの対話を通じ、異文化の身体表現が出会い、相互に問い直される場を提示し、国際的な注目を集めた。続く『アイ・アム・ア・デーモン（私は悪魔）』（2005年）では、コーンの基本動作を解体・再構成することで、伝統と個人の創造性の関係を根源的に問い直した。2010年には自身のダンスカンパニーを設立し、創作活動と並行して次世代の育成にも継続的に取り組み、若い表現者が伝統を基盤に新たな創作へと踏み出すための環境づくりに寄与している。

日本との関係も深く、横浜トリエンナーレ、フェスティバル/トーキョー、横浜国際舞台芸術ミーティング（YPAM）などの主要な芸術祭に参加するほか、2007年以来、神戸のNPO法人ダンスボックスとの継続的な協働を通じ、日本での市民・若手ダンサーとのワークショップや共同制作を重ねてきた。こうした活動は、国際的水準の舞踊表現を地域社会と共有する機会を生み、文化交流の実践としても高く評価されている。近年は、人工知能と伝統舞踊を融合させた『サイバー・スピン』（2024年）を発表するなど、技術の進展を取り込みながら、未来の身体表現に向けた探究を続けている。

このように、アジアの伝統的身体文化を礎に、現代社会と誠実に向き合いながら、舞踊表現の可能性を文化的・社会的両面から広げてきたピチェ・クランチェン氏は、まさに「福岡アジア文化賞 芸術・文化賞」にふさわしい。